

OMM (Original Mountain Marathon)

オリジナルマウンテンマラソン大会 2014年10月24-25日 イギリス・スコットランド



どこまでも続くヒースの丘を自由に走り回れるのが OMM の魅力だ

この秋、日本でも第一回が開催され注目を集めているアウトドアレース「OMM」。発祥の地イギリスで開催された大会に参加した。

2014年10月24-25日
イギリス・スコットランド
オリジナルマウンテンマラソン大会

マウンテンマラソンとの出会い

1970年代のエリートを目指す若いオリエンティアにとって、イギリス留

学中にオリエンテーリングを始め、見たこともないヨーロッパでのオリエンテーリングの様子を生言葉で語ってくれる杉山隆司氏(通称タック)の言葉は、預言者の言葉だった。その言葉の世界を成就したくて、北欧でのオリエンテーリングを目指した。オーリンゲンから世界選手権、あるいはフェルランニング(ノルウェーでの丘陵地でのロングディスタンストレーニング)まで、その世界は大方自分の目で確かめたが、ただ一つ残っていたものがある。それがスコットランドで開催されるマウンテンマラソンであった。

マウンテンマラソンは、アウトドア

用具のメーカーであったキャリマーが主催するイベントで、二日間で約60-80kmの荒野を走破する耐久ナビゲーション競技。特徴的なのは、二日の間の夜は指定されたキャンプ地で過ごすこと、さらにそのための荷物(テント、食料、寝袋など)は全て自分で担いで移動しなければならない点である。

イギリスでは、初期のオリエンテーリングの導入に功績のあったジョン・ディズリーなどによって始められた。現在は OMM (オリジナル・マウンテン・マラソン) と称して、同名のアウトドア用具メーカーの主催で行われている。

マウンテンマラソンには一回だけ、ニアミスした。1987年、遠征でノルウェーに行った時、世話をしてくれたグンナールが「オーリンゲンとは違う世界があるんだよ」と、ノルウェーの山間部で開催されたマウンテンマラソンに連れて行ってくれた。長距離を移動する装備も持っていなかったため、この時は見学だけだった。日本なら2500mを越えるような高地に相当する自然環境で終日雨の中、にこにこしながら走る選手を見て、北国の人の強さを垣間見た。それから30年近くが経ち、参加のチャンスが訪れた。

Dream is coming true

1年前、トレイルランナーとして独立した相馬剛さんが、僕のイベントに併催された交流会にやってきた。独立後 OMM のサポートを受けていた彼は、その招待で本国(イギリス)の OMM に出場することになっていた。パートナーにふさわしい体力、そして相馬さん自身のナビゲーションスキルを補ってくれる選手を探していた。その中で白羽の矢を立てたのがオリエンテーリング選手、柳下大だった。その時、僕も誘われた。このレースは広大なアウトドアで行われるという性質上、二人組での参加となる。日頃ロゲイニングでパートナーとなる田島利佳もまんざら嫌でもなさそうだった。OMM のレースのビデオを見ながら、「うわー、思いっきり UK っぽいですね！」って、4人で盛り上がった。

それから約半年が経った。その間に、相馬さんはマッターホルンの滑落事故で還らぬ人となった。相馬・柳下のお

まけで招待された僕たちは、遠征すべきなのだろうか？10月下旬なら、大学の授業も通常通り行われているし、他のイベントも毎週のようにある。そんな中で時間を捻出することができるのか、またその意義はあるのだろうか、そう自問し、また招待主である OMM のスタッフにも尋ねた。田島とも二人で悩んだ。

相馬さんなら僕らに何を望むだろうか。今行かなかったら、いつ行くの？何より、エクストリームな環境でのリスクマネジメントを研究する自分として、一般人が参加できるレースの中で最も過酷なレースに身を置くチャンスを手放すことなどありえるだろうか。それが決め手になって、参加が決まった。

過酷さがコンセプト

このレースのコンセプトを一言で表せば「過酷さ」である。二日間で 80km という距離は、昨今の長距離トレランを考えたらたいしたことなさそうだが、その間トレイルや林道を走れるのは半分以下。半分以上はオフトレイル、しかもイギリスらしい湿地、ヒースに覆われている。またこの時期のヨーロッパは基本的に天気不安定で雨や風に見舞われる。おまけに野営用具をひとそろい持っているから、最軽量でも 8kg 程度の装備を持たなければならない。悪天候の中で疲れて冷えた身体で、テントを張り、そこで休息とエネルギーをとり、寒くても一晩過ごし、翌日に備えなければならない。そこには、主催者の「これこそがアウトドアのエッセンス」という強烈な主張が込められている。

それを端的に表すのが、プログラムに書かれた、注意書きの次の一文である。「一日目の野営地の関門は 20 時である。20 時過ぎて帰還しない場合も、主催者は当該選手がトレイルのどこかで安全にビバークしていると想定する。」たとえ、決められた距離は移動できなくても、自分たちの安全を守る判断ができ、自力で夜を明かすこともできる。それが参加者に求められている資質なのだ。

一日たったの 30km、気軽な気分で A クラスに出場した僕らだったが、ふたを開けてみると、ベテラン（二人の合計年齢が 90 歳以上）で混合なのは、僕らとあと 1 チームしかいなかった。厳しいレースが予感されたが、レースは実際それ以上だった。

各 CP ごとに関門時間が設けられている。それが実によくできているのだ。2 番を 10 分で通過し、次の CP まで時間は 2 時間以上あったが、これもやはりぎりぎり通過する羽目となった。その後もことごとく関門の 5-10 分前に通過。とにかく前に進み続けるしかない。時間、吹き荒れる強風、湿地、あらゆるものが試練としてのしかかる。スタートは 9 時。日没まで 10 時間近くある。必須装備だから使うつもりもなく持って行ったヘッドライトを使うことになるとはね・・・。

関門時間が来て 2 つのポイントをスキップした。野営地についた時には 19 時を回っていた。身体が冷える前にテントを張り、風をしのげる場所を作る必要がある。狭いテントの中で、交代で着替え、夕食を作る。暖かいご飯、塩気の利いたおかずを食べ、食後の甘いコーヒーを味わう。明日もまた 30km の行程が待っている。

初日、2 つのポイントをスキップした僕たちは、二日目のコースを完走する理由はなかった。だが、1 番にいけば、ほぼトレイルの最遠部に足を踏み入れてしまう。一晩眠れば随分元気にもなっていた。さあ、行こう！ポイントは随分すつとばしたが、距離は正規コースの 8 割程度はカバーした。距離の割に達成感のないレースだったかもしれない。だが、いつかリベンジに来る日がやってくる。その時、二日目のこれだけの距離をカバーしたことは、大きな力となるだろう。



スタートは大作りだがオリエンテーリングに似ている。



斜面を登る田島に疲労の色が濃い。



ペアとしてのパフォーマンスを高めるために二人分の荷物を持つ。締めて 15kg。



湿地、雨、そして霧。



荷物を減らすため、テントも最軽量、830gr。もちろん内部のスペースは限られているが、写真を撮ると意外と広く見える。

オリエンテーリングの原点を求めて

この OMM は、11 月下旬に日本でも初めてのレースが行われた。決してメジャーになることはないレースだろう。だが、そこにはアウトドアのエッセンスと過酷さを乗り越えるというロマンが待っている。オリエンテーリングも元々は北欧での軍隊の斥候訓練から始まった。だとしたら、OMM のような環境で、行われていたことだろう。今では、競技としてすっかり洗練されてしまった。時にはその原点を見直すために、こんなレースに出てみるのもいいのではないだろうか？

(村越 真)